

ブルーノ・タウトの作品群

(ニーデンの教会、マクデブルグのジードルング、体育館、ベルリンの小住宅)

田中 辰明

お茶の水女子大学 名誉教授

はじめに

2011年はドイツと日本未来指向の友好150周年になる。1860年秋、オイレンブルク伯爵率いるプロイセンの東方アジア遠征団が江戸沖に来航し、翌1861年に江戸幕府と修好通商条約を結び、ここに両国の長い友好関係の礎が築かれた。この間日独の友好関係に寄与した人物は多い。その一人に建築家ブルーノ・タウトがいる。筆者らはブルーノ・タウトの業績を本誌で紹介してきた。ほとんど全ての現存するタウトの作品を紹介したつもりであったが、いくつか紹介出来なかった作品もある。日独修交150周年を記念し、これら作品を紹介する。

1. ニーデンのプロテスタント教会

本誌でタウトが修業時代に設計を行ったウンターレキシゲン(Unterrenxiengen)の教会を紹介した。これは1906年、タウト26歳の時の作品で師匠テオドール・フィッシャーの下で修業を行っていた時の作品である。



写真1 ニーデンの教会

タウトはこの仕事をしつつ仲間と芸術論を交わしたコリン(Chorin)で知り合ったヘッドビツヒ(Hedwig Wolgast)と結婚をしている。

タウトはプロテスタント信者であった。来日してからも世話になっている高崎の少林山達磨寺が達磨を売り、寺の運営に充てていることをカトリックが護摩を販売しているのと同じであ

ると苦言を呈している(1934年12月10日のタウトの日記)。しかし、毎週日曜日に教会に出かけるといった程の熱心な信者でもなかった。

タウトはウンターレキシゲンの教会のほかにニーデン(Nieden)という村でやはり教会の内装を設計している。筆者は2009年6月24日にこの教会を訪問し調査を行った。ニーデンは旧東独のメクレンブルグ・フォアポンメルン(Mecklenburg Vorpommern)州にある。このウカー・ランドウ(Uecker Randow)という地区にあり、村の面積は6.49km²、人口わずか187名である。この村に教会がある。かつてはカトリック教会であったが、現在はプロテスタント教会になっている。牧師が常駐してはならず、月に1回巡回してくるとの情報を得た。日本からの調査でそのタイミングに合わせて内部を拝観させていただくことは極めて困難であった。どうにか内部を見せてほしいとお願いし、結局教会の鍵を預かっている婦人の住所を得ることができた。その方に電話をし、鍵を開けて頂くこととし、訪問した。

ドイツ鉄道でベルリンから最寄りのネクリン(Nechlin)まで行き、そこから1日に数えるほどしか出ていないバスでニーデン村へ向かった。教会にほど近い停留所で降り



写真2 ニーデンの教会



写真3 ニーデンの教会の天井の絵



写真4 改修に関わったブルーノ・タウトの名前も天井に残っている



写真5 ニーデンの教会の祭壇



写真6 ニーデンの教会の説教壇

ると、もうバスは空になって次ぎの停留所に向かって去って行った。降り際に運転手はバスが終点に行き戻ってくる時間を筆者に伝えてくれた。約2時間後であった。ただし、これを逃がすと6時間は待たなければいけない。2時間後のバスに乗ることを決め教会へ向かった。

教会の門には約束通り初老の婦人が鍵を持って待っていてくれた(写真1、2)。婦人について教会に入った。プロテスタントの教会は飾りも少なく地味な感じのものがほとんどである。しかし、この教会はそうではなかった。前知識にあったカトリックからプロテスタントに変わったという事が良くわかる。天井にもさまざまな模様があるし、壁面にも素晴らしい図柄がある。また天井には沢山の天使の絵が描かれているが、大分古いものらしく既に

損傷も進んでいる(写真3)。天使は楽器を奏でているものもある。

教会の入口に近い天井には改修工事にかかわった人たちの名前が書かれている。そこにブルーノ・タウトの名前もあった(写真4)。ウンターレキシングンの教会の祭壇裏には「B.T.1906」というタウトの彫りがあったが、ここにはそのような記録はなかった。鍵を開けてくれた初老の婦人にこの事を聞くと、当時の牧師がそれを許さなかったとの事であった。婦人は、この教会は13世紀に後期ロマネスクの様式で建設され、ルネッサンス時代1618年にバロック様式の説教壇が建設されたと説明してくれた。17世紀に洗礼の天使が作られ天井から下げられたとの事であった。信者席と祭壇も普通のプロテスタント教会



写真7 ニーデンの教会の階段

と比較するとかなり派手である(写真5)。説教壇も同様である(写真6)。教会の入口近くには2階に昇る階段があった(写真7)。緩い曲線を描く階段は今までベルリンの集合住宅で良く見たタウト設計の階段を髣髴とさせるものであった。タウトがこの仕事をしたのが1910年であるので、タウトの作品とするとこの教会の方がベルリンの集合住宅よりも早いのであるが、この階段の近くにあった柱も太い部分と絞り込んだ部分が交互に存在するかなり凝った形をしている。

教会の鍵を開けてくださった婦人に促されてこの階段を上ると、そこには実に1357年に鑄造されたという鐘が見つかるされており、教会の歴史を物語っていた。教会の中を隅々拝見するうちにバスが出る時間は刻々迫っていた。その間付き合ってください鍵番の婦人に東京から来た甲斐があったとお礼を述べ辞去することにした。気が付かなかったが、さっき教会に入った時には婦人が開けておいてくれた教会と風除け室との間の扉は外部の風が教会内に入らないように閉められていた。しかしこの扉も素晴らしい円形のガラス窓が付けられ、扉に設けられた模様とよく調和をしていた(写真8)。

2. マクデブルクのジードルング

マクデブルクとはエルベ河に沿った旧東独の都市で、現在はザクセン・アンハルト州の州都である。変遷の激しかった町で第二次世界大戦において激しい爆撃を受け町の大部分は破壊された。しかし町の最盛期にはカイザー大聖堂(Kaiserdom)、ウンザレ・リーベン・フラウエン修道院などが建てられ、現在も皇帝都市の豪華さをうかがわせている。カイザー大聖堂はオットー大帝によ



写真8 ニーデンの教会の風除け室と教会の間の扉

り建設され、ドイツ語圏で最も古いゴシック様式の宗教建築である。オットー一世は973年に没しここに葬られている。

ブルーノ・タウトは1921年から1924年の間、マクデブルク市の建設技監として勤務している。ここでタウトは自ら「フリーリヒト(Frühlicht)」という建築雑誌を編集し「すべての建築に色彩を」といった「色彩宣言」を挙げ、かつそれを実施した。この時代よりも早く1913年に田園都市・改革(Reform)というジードルング(住宅団地)をこの町に設計している。この年にタウトはドイツ田園都市協会の主任建築技師となっている。また実弟のマックス・タウトとホフマンを加え共同の建築事務所をベルリンに開いた年でもある。

本誌で紹介した田園都市ファルケンベルグ(Gartenstadt Falkenberg)は1913年から1916年にかけて建設された。2008年7月にタウトの住宅団地4件がユネスコの世界文化遺産に指定され、田園都市ファルケンベルクもその1つであるが、これを除く他の3件は1920年代に建設されたものである。

田園都市リフォルム(マクデブルク)と田園都市ファクケンベルグ(ベルリン)はタウトの同じ年の作品であるだけに極めて共通点が多い。黄土色の外壁にタウトが多くベルリンの集合住宅に残した赤い玄関扉を配置した集合住宅(写真9)やワインレッドの外壁に同じ赤い玄関扉を配置した集合住宅さらに土壁の外壁にやはり同じ赤い玄関扉を配置した集合住宅(写真10)が並ぶ。これらはツア・



写真9 リフォルムの黄土色の外壁を持つ集合住宅



写真10 リフォルムの土色の外壁を持つ集合住宅



写真11 リフォルムという文字がある集合住宅と商店

ジードルング・リフォルム(Zur Siedlung Reform)という道に沿って建てられている。土壁の集合住宅の前には旧東独時代の国民車であったトラバンク(愛称トラッピー)をスポーツカーに改造した小型車が駐車してあった。旧東独地域では統合20年が経過しても東西の経済格差が縮小されない、しかも失業率が高いことから旧東独を懐かしむ運動もある。東をドイツ語でオスト(Ost)という。望郷を意味するノスタルギー(Nostalgie)と引っかけオスタルギー(Ostalgie)という言葉もできている。性能は決してよくない旧東独の国民車を愛用するのも、このオスタルギーから来ているのであろう。

また、この住宅の屋根には煙突が設けられている。これは暖房器具としてカッヘルオーフェンが使用されていたことを示すものである。このような煙突があったからこそサンタクロースが煙突から入ってきて子供たちにプレゼントを置いていくといったキリスト教に関する民話もできたのである。商店と集合住宅が一体となった建物



写真12 リフォルムの顕彰碑

がありここにリフォルム(Reform : 改革)という文字が残っていた(写真11)。このリフォルムのジードルングには「1909-1989マクデブルグの田園都市「リフォルム(Reform)」の建設者に捧げる」と記されたプレートが石に張っておかれていた(写真12)。少女が頭を下げている図柄があることから、ブルーノ・タウトを初めとするジードルング建設者に対する感謝の気持ちを表したものである。



写真13 リフォーム集合住宅の玄関

マクデブルグも冬季は積雪があるようで、集合住宅の赤い玄関に入るには石段を上って入らなければならないように建設されている(写真13)。このジードルングの外れには老朽化した集合住宅も残っていた。屋根だけは比較的最近になって代えられたようであるが、外壁の老朽化は進んでいる。ドイツではまず屋外配線が地上に出ていることはない。しかし、ここでは旧東独という事もあるのか、珍しくも架空配線を見た(写真14)。現在経済的にも順調で我が国を引き離していく感がある韓国で架空配線の地下埋設化が進んでいる。ここにきて架空配線の地下埋設化に全く興味を示さない我が国の状態を考え、いささか懐かしさを覚えた。

3. マクデブルクの体育館

1922年にタウトはマクデブルグ市建設技監として「マクデブルグの都市と田園の為のホール(Halle für Stadt und Land)」と呼ぶ体育館を建設している。リフォームのジードルングでは派手な色彩を用いている。1920年にタウトはアルプス建築(Alpenbau)という書籍を出し輝くばかりのファンタジーを示した。まさに表現主義第一人者の建築家であった。これらと同一人物の作品かと思われるのがこの体育館である。ここでタウトは新しい構造方式で大空間を合理的に解決している。タウトの主張した表現主義は一時のあだ花であったのか?ここでは表現主



写真14 リフォームの老朽化した集合住宅と架空配線

義は消え去っている。表現主義の建築家から勤労者の集合住宅を大量に建設し、「社会主義建築家」と呼ばれるようになった過程で建設されたものと解釈もできよう。

体育館の正面であるが黄土色に彩色されている(写真15)。中に入ると特徴のある階段に目が行った。タウトの階段はいつも印象的である(写真16)。廊下からホール内部に扉を開けて入る。この扉はゲームが終了したときに一斉に観客が外へ出ることに対処し数多くつけられているが、凝った仕様になっている(写真17)。体育館の大架構が見え、内部で2,3名の人がトレーニングを行っていた(写真18)。この構造は従来のタウトの作品からは想像がつかないものであった。しかし、屋根には天空光を取り入れるべく線状にガラスがはめ込まれ、自然採光により体育館を明るくしていた。誰もいない観客席もさびしげではあったが、段状にベンチが取り付けられ、どこからも試合の様子が見物できるようになっていた。

筆者のマクデブルグの体育館とリフォームのジードルング訪問は2010年6月28日であった。タウトと共に来日した伴侶エリカの間にはクラリッサという娘がいた。クラリッサはすでに亡くなり、さらにその娘、タウトとエリカのお孫さんがフランクフルトの郊外ロドガウ(Rodgau)というところに住んでいることがわかっていった。この方はスザンネ・キーファー・タウト(Susanne Kiefer Taut)さんと言う。今回の調査ではこのスザンネ・キーファー・タウトさんを訪問することにしていた。マクデブルグでのタウトの作品調査にももっと時間が必要であったがフランクフルトへ向かう列車に乗らなければいけなかった。従来のタウトの作風とは全く異なる体育館の謎が解けないまま後ろ髪をひかれる思いで列車に乗り込んだ次第である。



写真15 マクデブルグの体育館



写真16 マクデブルグ体育館の階段



写真17 マクデブルグ体育館の扉



写真18 マクデブルグ体育館の内部

列車に乗り込み、考えた。ドイツは1918年に第一次世界大戦の休戦条約を締結。1919年にドイツにとって屈辱的なヴェルサイユ条約を締結し敗戦国になっている。タウトが夢見た表現主義も時代と共により現実的なものへ変更せざるを得なかったのではないかと推測される。あまり社会主義に走ったので台頭してきたナチス政権にいらまれ、亡命のようなかたちで来日し、ついに「日本美の再発見」に至ったのであろう。日本では桂離宮や伊勢神宮のような白木の建築を褒め上げている。色彩宣言は何処へ消えたのか？これについてタウトは服装との関係を述べている。日本人の当時の服装(和装)は極めて派手であった。

それに比べ当時のドイツ人は現在の日本人が着るようなドブネズミ色の服装をしていたそうである。したがって派手な色の和装には白木の建築が似合い、ドブネズミ色には派手な色の建築が似合うとの事である。

4. ベルリン、ブリッツの小住宅

ベルリンのブリッツにタウトは馬蹄形住宅と呼ぶ大きなジードルングを1925年から1930年にかけて建設してい



写真19 ベルリン市ブリッツの馬蹄形ジードルング



写真20 ブリッツにある小住宅

る。このジードルングも2008年7月にユネスコの世界文化遺産に指定されている(写真19)。これについては本誌で既に紹介している。

馬蹄形住宅も一部老朽化が始まり、この維持管理・保存も必要である。また、新しく移住してくる人がいると住まい方のルールを守ってもらう必要もあり、保存会がある。筆者はこの保存会を訪問し、どのような活動をしているのか伺った事がある。この保存会の代表はカトリン・レッサーさん(Katrin Lesser)という。田園都市ファルケンベルクの建設ではブルーノ・タウトに庭園建築家であるルドビック・レッサー(Ludwig Lesser)という人物が協力している。カトリンさんはこの方のひ孫さんであり、ご本人も庭園建築家として活躍している。庭園に関する著書も多い。

この方から「ブリッツの馬蹄形住宅の近くにブルーノ・タウトが設計した小住宅が残っており保存のために自分で購入し、修理中である。興味があれば見に来ないか？」という連絡が入った。筆者は「タウトが設計し現存している作品は殆ど訪問調査したと公言していたのに、また新しい作品が現れたか...小住宅というのも珍しいし出かけよう」と思い2010年10月2日に訪問した。

レッサーさんは約束の時間にこの小住宅で待っていてくださり、温かく迎えて頂いた。この小住宅は馬蹄形住宅の近くギーローヴァー通り(Gielowerstr.)にある。2階建てのこじんまりした住宅である(写真20)。住宅の玄関は薄い青の玄関扉がありレンガの腰壁がついている(写真21)。レッサーさんに促されて、ここを入ると2階に昇る



写真21 ブリッツにある小住宅玄関

階段があった(写真22)。ペンキもはげ落ちてはいるが踏面は緑に、蹴上は茶色にそして手すりは黄色に塗装されていたことが分かった。タウト設計の集合住宅に良く見られるように階段の傾斜は急である。厨房に入るのにドアを開けなければいけない。このドアのつくりもタウト設計の集合住宅で良く見るものである。タウト設計の住宅で良く見るのと同じドアノブがついていた(写真23)。厨房内部はペンキも落ちた状態で、古い厨房器具が残されていた(写真24)。

レッサーさんはタウトの設計当時と同じように塗装し、補修するとの事であった。居間と思われる部屋には当時使用されていた陶製の暖房器であるカッヘルオーヘン



写真22 ブリッツにある小住宅階段



写真24 ブリッツにある小住宅に残る厨房器具



写真25 ブリッツにある小住宅に残るカッヘルオーフェン



写真23 ブリッツにある小住宅のドアノブ

(Kachelofen)が残されていた(写真25)。カッヘルオーフェンはお城にあるような豪華なものから庶民住宅にある単に化粧タイルを張ったものまで様々なものがある。ここのカッヘルオーフェンは庶民住宅で使用された典型的なものである。レッサーさんは既にこの近くに立派な住宅を所有している。この小住宅をどのように使用するか聞いてみた。すると「週末住宅や中期滞在の人に安く貸したい」との事であった。筆者は早速この住宅の使用を申し出た次第である。

おわりに

筆者がブルーノ・タウトの研究を始めたのは1972年である。ベルリン工科大学留学中に大学時代の恩師である建築家・武基雄¹⁾早稲田大学教授(当時)の訪問を受けて研究が始まった。当時筆者が大して興味を持たなかったオンケルトムズヒュッテの特定の集合住宅を見学したいとの申し出を受けて以来である。ご案内した際に恩師は

放心した状態でその集合住宅の前に立っていたのをつい先日のように思い出す。その夜ベルリンの拙宅を訪問してくださり、ブルーノ・タウトと早稲田の建築学科とのかかわり、タウトの講演を何度か聞いたことがあるなど興味深く話してくれた。それ以来筆者もタウトの研究を始めた次第である。お陰様でタウトを軸にいろいろの方と知り合うことができ協力を得ることが出来るようになった。大変に有りがたい事と考えている。

武基雄教授が放心した状態で立っていた集合住宅はベルリン市オンケルトムズヒュッテの森の団地、リーマイスター通り(Riemeisterstr.)にある。このことを友人に話すと武先生は「その時どう言ったのか」と聞かれることがある。「どうしてその時に感想を聞かなかったのか?」いや当時はその集合住宅が初めてタウトの作品であることを恩師から教わっただけで筆者は大して興味がなかったので、聞かなかったのである。恩師は1979年に脳溢血で倒れ、2005年に他界され、ついにその事を聞くことが出来なかった。今思えば残念な事をしたものである。友人に言わせると本心から感激したのか、いや大したことはないという感想だったのでないか、それともタウトの講演を聞いたことに対する郷愁だけが、それが知りたいとの事であった。

1) 長崎水族館、長崎市公会堂、古川市民会館、鎌倉商工会議所、島原文化会館、吉井町産業文化会館、島原市図書館などの作品がある。